

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

オラン・アスリの川筋ナビゲーション

河合文 (千葉大学大学院人文社会科学部研究科博士後期課程)

マレーシアで生活していると、社会と河川の親密さに気づくことがあるかもしれない。「クアラ・ルンプール」のように川に関連した地名が多い。日本語で「右も左も分からない」と言うところを、「上流も下流も分からない (tidak mengetahui hulu-hilirnya)」と表現することもある。また日本にも同様の表現法がありはするが、経済的分野では、原料や部品を提供する産業を「上流産業 (industri hulu)」、加工等を担う産業を「下流産業 (industri hilir)」という。その昔、河川が主要な交通網であったマレーシア半島部では、上流で採集された森林産物が下流の河口へと運ばれ、外海との交易に充てられていた。その名残だといわれている。



いかだで「母川」を移動する

上流部で籐や沈香などの森林産物を採集するオラン・アスリのなかには、現在も川をナビゲーションに用いる人々がいる。オラン・アスリとは、マレーシア半島部のエスニック・グループである。居住域、生活様式、使用言語等によって複数のグループに分けられている。なかでも狩猟・採集と森林産物の交易を主な生業とし、遊動的な暮らしを送ってきた人々は、セマンと呼ばれる。オラン・アスリの多くは各地のオラン・アスリ村に居住しているが、クランタン州のタマン・ヌガラ近辺に暮らすセマンの1グループ、バテッは、村の生活と森でのキャンプを組み合わせ暮らしている。雨期は村に滞在するが、3月頃より森での生活が増え、吹矢猟やランブータンなどの果実採集、現金収入源となる森林産物採集を行うのである。

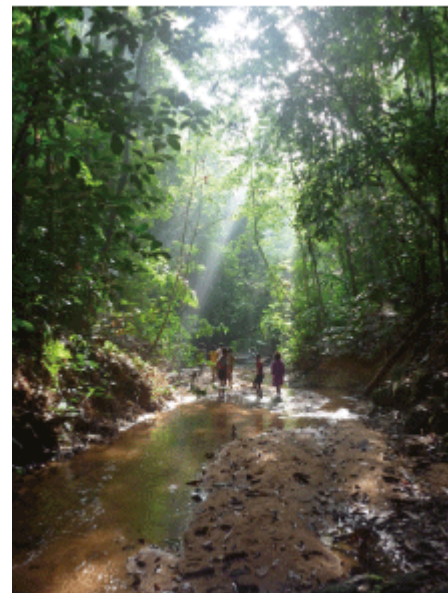


キャンプに出発

オラン・アスリがキャンプや森林産物採集で利用する一帯には、標高300~1,000メートル程の山々が林立する。裾野の水は集まって流れをなし、合流して緩やかに蛇行する川となる。川の流れる森に道は存在しない。木々やツタが茂って見通しが悪く、たとえ道や目印をつけても短期間で森に埋もれてしまう。このような環境を、地図やコンパスを使わずに移動するのである。

彼らが森を歩く際の経路決定、ナビゲーションにおいて重要なのは、水系と、移動時に感じられる重力である。身

体と重力との関係で地形を把握するのだ。これは彼らが用いるバテッ語の特徴を生かして巧みに行なわれる。移動を表す際に、「行く」というような水平の動きを表す動詞が使われることは稀である。そのかわり、身体を重力に逆らって上に移動させるか、重力に沿って移動させるかという点を含めて意味が規定された語が用いられる。たとえば「ガラッ(本流を筏で上るという意)」、「スィンセン(支流を歩いて上るという意)」、「チュワ(斜面を登るという意)」といったものである。また方位に関しては、主に「上流・下流」という方位語が使用され、東西南北や左右という語はバテッ語には存在しない。



「子川」で遊ぶ

水系の把握には母子関係との類似性が利用される。本流は「母川」と呼ばれ、そこに流れ込む支流はその「子供の川(子川)」としてセットで記憶される。そして、個々の「子供たち」がどういった順番で母川に並んでいるのかも記憶されている。このようにして多数の川が体系づけられ、水系の構造として把握されているのである。

例えば、尾根伝いに標高の高い地点へ移動したいとする。尾根は本流と並行するため、母川の上流への移動を応用したナビゲーションがとられる。尾根にある溪のいくつかは、子川と結び付けられて記憶されている。このため地面の起伏を意識しながら尾根を歩き、アップ・ダウンが終わった辺りで、その溪と結びつけられた子川が母川のどの辺りの支流かということから、自分の位置を確認するのだ。これが、道路のない森を移動する際の彼らの川筋ナビゲーションである。

しかし、こうした彼らの間でも、奥地における道路建設に伴って車やバイクの利用が増加している。マレーシアの人々の暮らしと川との関係は、変容を遂げつつあるようだ。

< 筆者紹介 >

1983年生まれ。千葉大学大学院人文社会科学部・博士後期課程在籍。2010年よりクランタン州のオラン・アスリを対象に調査を行う。専門は文化人類学。